

1167 中枢性めまいを呈する患者の ^{99m}Tc -HMPAO SPECT

滝 鈴佳、角田清志、鹿熊一人（市立砺波総合病院放射線科）

中枢性めまい（回転性めまい、立ち眩み、ふらつき）を呈し、CTおよびMRIで異常所見を認めず、椎骨脳底動脈不全症を疑われた患者25例の ^{99m}Tc -HMPAOによる脳血流SPECT所見について検討した。全例に安静仰臥位でRI angiographyとSPECT撮像を行い、Patolack法によるmCBFとSPECT像から、Lassenらの補正式を用いて、rCBFを算出した。結果は、25例中20例（80%）にrCBFの低下を認め、うち、椎骨脳底動脈領域の低下が7例（35%）、内頸動脈領域の低下が4例（20%）、これら双方の領域にわたる低下が9例（45%）認められた。中枢性めまいを呈する患者は、椎骨脳底動脈系のみならず、内頸動脈系の血流不全が関与する症例も含まれるものと考えられた。

1168 テント上病変による皮質橋小脳路障害と対側小脳血流

石原真木子、水村 直、趙 圭一、汲田伸一郎、木島鉄仁、高浜克也、隈崎達夫（日医大放）

Crossed Cerebellar Diaschisis(CCD)の主因として皮質橋小脳路(CPCF)を介する遠隔効果が指摘されているが、各神経伝達レベルでの障害度とCCDの関係については十分な検討がなされていない。我々は、テント上のみ病変を有する21例を対象に、CPCFのテント上経路である一次運動野(PM)、白質(WM)及び内包後脚(IC)の障害をX線CT像上の吸収値と病変の拡がりの程度で数量化(障害度指数)した。ついで ^{123}I -IMP脳血流SPECT像より対側小脳血流量の低下を健側比として計測、障害度指数との関連を検討した。各レベルでの障害度指数はいずれも対側小脳の血流低下に有意な関連を示し($p<0.05$)、PM、WM、ICを含めた重回帰分析では重相関係数0.675と良好な相関を認めた。

1169 記憶障害をもつ種々の疾患における脳血流SPECTの検討

堀川 歩、勝山直文、山口慶一郎、大田 豊、與儀 正、鷲野谷利幸、又吉 隆、中野政雄（琉球大 放）

軽症痴呆をはじめとして、記憶障害を有する種々の疾患にて、その脳血流の低下パターンについて検討した。

対象はAlzheimer型痴呆、parkinsonism、アルコール性痴呆、心因性健忘等の20例である。放射性医薬品はI-123 IMP、またはTc-99m HM-PAOを用いた。多くは全体的な大脳皮質の血流低下、または側頭頭頂葉の血流低下がみられた。前頭葉のみの血流低下も少数例にみられた。多くの症例では深部灰白質血流は保たれていた。記憶障害改善後にも経過を追えた症例では、一部に血流低下が持続していた。記憶障害のfocusについて検討した。

1170 ^{123}I -IMP脳SPECTによる、高齢者痴呆群と初老期痴呆群の比較検討

間島寧興、川上睦美、野上修二、丹野宗彦、千葉一夫（都老医セ核放）、吉越富久夫、大石幸彦（慈恵医大泌）、成瀬昭二（京府医大放）

我々は、 ^{123}I -IMP脳SPECTのearlyおよびdelay画像によるパターン分類を試みている。今回、MRI画像上、病的脳萎縮変化の少ない痴呆疾患を中心に、高齢者（75歳以上）群と初老期痴呆群（50～60歳台）のパターン分類比較を試みたので報告する。パターン分類は、大きく次の3群に分類する事ができた。減少型、平行型、増大型の3群である。初老期痴呆群においては、減少型が約95%、平行型が5%の割合で認められた。高齢者群においては、減少型50%、平行型が30%、増大型が20%の割合で認められ、本法のパターン分類により、痴呆病態の進行を把握できる可能性が考えられた。